

「発達のモラルレジリエンス」モデルの提案 -思春期における悪との接触に対する青年期のとらえ直し-

広島国際大学心理学部教職教室 鹿嶋 達哉

ふいに彼女は自分が何一つ犯され、汚されていないのを感じた。…そうだ、真実を語って生きていこう。そして、立派に生き残って見せよう。

P. D. James 「皮膚の下の頭蓋骨」

1 思春期における悪との接触とその影響

思春期はさまざまな「悪」と接触する時期である。いじめや非行に加え、友人の裏切りや仲間はずれ、親や教師など大人との葛藤や対立、ルール違反やマナー違反などの身近な問題行動のみならず、社会や世界の悪（戦争、テロ、貧困）に目が向き、心のなかの悪（ずるさ、劣等感、嫉妬…）にも直面させられる。

特に、思春期の悪との接触は、a) つらい体験をした自分、適切な対処が取れなかった自己の受容、b) 問題行動の当事者や傍観者となった仲間との関係の再構成、c) 適切な対処をしなかった大人に対する信頼感の回復、d) 問題行動の土壌となり、解決できない社会の受容とその中における自己の定位など、大人になるための課題を残す。悪の生起や悪との接触を抑制する努力に加え、悪との接触は不可避であるため、その体験を意味づけ、とらえ直していくことにより「悪とのつきあい方」を自分のものにしていくこと（appropriation）が思春期・青年期の発達課題となると考えられる。

1.1 思春期における悪との接触

「思春期自体がハイリスク状態」（青木，2012）と言われるほど、思春期は多様な困難に直面する時期である。「思春期に接触する悪」については別稿で考察することにし、ここでは本研究が想定する「悪」について必要な範囲で素描する。そもそも心理学において「悪」それ自体が直接、研究や考察の対象となることは少ない。しかし、いじめ、非行、不登校（不登校＝悪ではなく、本人や周囲が「悪いこと」として理解している意味において）、さらには日常的な対人関係のトラブル、種々のルールからの逸脱、自己批判等、「悪」は思春期の心理と行動の重要なテーマであるとともに、種々の問題の背景をなすものである。

「悪」は多義的で多面的な概念である。中村（1994）は「悪のカタログ」として①カオス、②穢れ、③悪魔、④破壊、⑤苦しみをあげている。宮谷（2004）は悪として、①醜さ、②貧しさ、③弱さ、④愚かさ、道徳的にあやまれる行為、⑤使用不可・無成果、⑥望んだものと反対のもの、⑦害・苦痛、⑧不幸、⑨不公平、⑩抽象的な悪、⑪危険な状態、⑫病気・苦勞、⑬不安、嘆き、⑭不快、⑮善の反対、不正、⑯危険を列挙している。本研究に関連しない「悪」は数少ない。本研究で対象となる悪については《2.3》に後述する。

子どもは悪とさまざまな様式で関わる。思春期の子どもが行う「悪」については、氏原（1985）や河合（1997, 1999）、横湯（2002）が興味深い論考を行っている。また、子どもは虐待や犯罪、事

故、社会経済的環境の最大の被害者でもあり、「子ども被害者学」(Finkelhor, 2010)が提案されている。本研究で対象・テーマとなるのは直接の主体や被害者にならなくても多くの子どもが体験し影響を受ける多様な「悪」の体験である。

1.2 思春期における悪との接触の長期的影響

思春期の悪との接触は長期的な影響を有する。いじめの被害者であった大学生は、自尊感情や特性不安、Well-being (水谷・吉津・雨宮, 2010)、心身の健康度や抑うつ傾向 (大久保, 2012)、愛着の在り方 (三宅, 2004)、友人関係 (野中・永田, 2010 ; 山口・長野, 2012)、抑うつや自傷のリスク (村山・伊藤・浜田・中島・野田・片桐・高柳・田中・辻井, 2015) に負の影響がみられた。加害者にも「心の痛む体験」として残る (戸田, 1997)。被害者のみならず傍観者においても対人恐怖傾向と自尊感情に影響がみられた (大久保, 2012)。また、加藤 (2007) によると学校の荒れには一般生徒が影響力を有し、問題行動の見方や教師との関係、反学校的文化の形成等を通して荒れを助長する。

しかし、その影響と評価はマイナスばかりではなく多様である。文部科学省 (2001) の調査では、不登校の体験は「後悔している」(36%)、「仕方がなかった」(31%)、「むしろよかった」(28%)と振り返られ、現在の状況に及ぼす影響は「マイナス」(24%)、「マイナスではない」(39%)、「どちらでもない」(35%)と評価されていた。また、a)他者との関係、b)新たな可能性、c)人間としての強さ、d)精神的変容、e)人生に対する感謝などの心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth, PTG ; 三宅, 2010 ; 《2.6》に後述) が見られる場合もある。

2 発達のモラルレジリエンス概念の導入と提案

2.1 レジリエンス概念の導入と概観

1で述べたように発達途上における負の体験・環境の影響の多様性や、それに抵抗・適応を示し、さらには健康な発達を遂げる子どもを理解・説明するときには有用な概念が「レジリエンス (resilience)」である。APAは「レジリエンスは逆境、心的外傷体験、悲惨な出来事、脅威などのストレスにうまく適応する過程のことである。…つまり、困難な体験からの回復を意味する。」と定義している (石垣, 2017)。Rutter (2006)は「高リスク環境要因の経験に対する個体の相対的な抵抗力、あるいはストレスや逆境の克服」と定義している。レジリエンスは、a)ハイリスク状況にもかかわらず良好な発達結果を示す場合、b)ストレス下での持続したコンピテンス、c)悲惨な逆境や深刻な喪失からの回復などを説明する場合に用いられる (Resnick, M. D. & Taliaferro, L. A., 2014)。

レジリエンス概念は有用である一方、多義的・あいまいな概念であり、ア)過程として①出来事生起以前、②出来事への反応、③回復途中、④回復完了、⑤過程全体をさすのか、イ) a)潜在的に存在し教育により育てられる能力 (コンピテンス) なのか、b)逆境への対応の仕方 (パフォーマンス) なのか、ウ) a)個人、b)対人ネットワーク、c)コミュニティのどのレベルにあるのか、エ) a)負の低減に限定されるのか、b)正の増加 (成長) を含むのかなど整理を要する。また、これまでの概念の「ラベルの付け替え」ではないかという批判 (石川, 2017) もあり、関連する概念との比較・

整理が必要である。

2.2 発達のモラルレジリエンス (DMR) 概念の導入とレジリエンスとの比較 (概観)

レジリエンスは元来、「ストレス」に対する「適応・回復」をさす。そこで本稿では違いを明確にするためにあえてストレス・レジリエンス SR と呼ぶ。本研究のテーマは思春期に悪と接触することに生じたネガティブな体験が自分・仲間・大人・社会に対する見方や関わり方にどのような変化をもたらし、さらに青年期にどのような変容をなすとげるか、特に青年期において思春期の体験をどのように「とらえ直す」かである。そこで本研究では「発達のモラルレジリエンス (Developmental Moral Resilience; DMR)」を提案する。「モラルレジリエンス」はSRの過程に対応させると、①「悪との接触」にそなえ、②接触に対して効果的に対処し、③その悪影響から回復し、④成長する過程と能力を指す。また、「発達の」は、a) 単に負の状態からの回復のみならず発達・成長を含む、b) 発達課題と密接に関連しながら、c) 発達段階を越える (本研究では思春期～青年期、さらに成人期への展望を含む)、d) モラル面のみならず、認知的・感情的・社会的側面を含む全体的発達のなかでとらえられる、e) SRのような「偶発的危機 (一部の人が遭遇)」よりも「発達の危機 (多くの人が発達段階に応じて遭遇)」としての特徴を有することから付加した。

SRとDMRには次のような違いがある。①「出来事」がSRでは劣悪な環境や高リスクな出来事であることを指すが、DMRでは「悪との接触」である。②対処としてSRでは効果的な機能の維持が求められるが、DMRでは直接的対処 (悪の除去) や回避に加え、見方や関わり方の変化が求められる。③回復はSRでは機能が出来事以前の水準・あるいはそれ以上に戻ることを指すが、DMRでは質的な発達の变化と成長を含意する。

「モラル (moral)」という英語・フランス語に由来するカタカナ表記を用い、それに対応する訳語・概念である「道徳」を用いなかったのは次の理由による。ア) 道徳は日本国語大辞典 (第二版, 2001年, 第9巻) によると「人間がそれに従って、行為すべき正当な原理 (道) と、その原理に従って行為できるように育成された人間の習慣 (徳)」である。一方、moralは The American Heritage Dictionary of the English Language (1981) によると、①人間の行為や性格の善悪の判断に関わること、②善悪の教育に関すること、③善の基準、もしくは確立された行動コードにしたがっている行為・状態、④良心や正邪の感覚から生起するもの (⑤⑥略) とある。道徳の基準は規範・習慣、moralの基準は善悪であり、本研究のテーマは後者の善悪である。イ) 悪の定義 (日本語大辞典第二版 2000年第1巻) は「(道徳、正義、法などに反することをいう) わるいこと、よこしまなこと」とあり、悪は道徳よりも大きな包括的な概念である。ウ) 心理学で行われている道徳の研究においては「悪」は直接的に扱われていない。心理学辞典・事典、発達心理学ハンドブック、「児童心理学の進歩」には「悪」という項目は索引にない。エ) 中学校学習指導要領では、道徳の内容として a) 自分自身、b) 他の人とのかかわり、c) 自然や崇高なものとのかかわり、d) 集団や社会とのかかわりに関することに大別され、善悪・正邪ということばは使われていない。

2.3 発達のモラルレジリエンスとレジリエンスとの比較 I : 出来事

レジリエンスが元来、対象としてきた困難・脅威をもたらす出来事は直接的な経験状況と間接的

Table1 思春期における悪の体験（対象別）

対象	悪の体験
自分	私を出せない／周囲に合わせすぎる、孤立する、自分らしさがわからない・ 出せない、自己否定、自分のことについて悩む、悲しい・不幸、無力感を抱く、 荒れる、周囲まで目がいかない、人に迷惑かける、まじめ葛藤、性への関心、 大人／子ども役割の葛藤、将来への不安
仲間	仲間との敵対、集団からはみ出す怖さ、集団・仲間への同調、いじめ被害、 いじめ加害、非行体験・非行少年、不登校、仲間に悩む、異性、周囲からの圧力
大人	否定、両面感情
親	距離化、反抗、期待の重圧、不安、侵入・過干渉、支援不足
教師	無関心、無理解、無思慮、無責任、差別、上から目線、誤指導法、不信、反抗
社会	家庭問題、学校への不安・恐怖、家庭と学校のスレ、居場所がない、社会の否定

な経験状況に大別される（石原・中丸，2007）。前者には重篤な障害、慢性的な病気、社会経済的な不利、破滅的なライフイベント、戦争などが、後者には家族の病気や障害や貧困、両親の離婚や失業や低収入、虐待等が含まれる。

DMRに関連する思春期の出来事に関して、鹿嶋（2017）は大学生に対する予備的な調査から、「悪」を体験する対象（自分・私、仲間、大人・親・教師、社会）により分類した（Table1）。

このように思春期には非行・犯罪やいじめなどの悪（evil）だけではなく、不登校や人との行き違い、学校・社会に対する違和感などの悪（bad, wrong, inappropriate）を体験する。これらを鹿嶋（2017）は仮に「ダメ、間違い、つらい、いつわり」の4つに分類した。

2.4 発達のモラルレジリエンスとレジリエンスとの比較Ⅱ：過程と保護・危険要因

レジリエンス過程（小塩，2016）では、①出来事（思春期における悪との接触）以前、②悪との接触とそれによる困難、③そこからの回復過程・契機、④回復の完了、⑤体験による発達・成長の体験、および⑥①～⑤に影響する要因について検討が行われてきた。

DMRの過程について述べる。①出来事以前としては、思春期以前の悪との接触や関わり、悪による被害があげられる。これらはa)虐待や事故・事件の被害者等、思春期以前から継続するもの、b)以前から存在するが思春期に質的に変化するもの（いじめ）、c)思春期に顕著に出現するもの（非行、不登校）がある。本研究ではいずれも取り上げることとする。

②悪との接触については《2.3》において述べた。

③回復過程にはア)変化自体、イ)保護要因、ウ)危険要因が含まれる。ア)トラウマイベントからの回復過程には、成長（当初の出来事時よりもよくなる）、抵抗（悪化をふみとどまる）、回復（出来事時まで戻る）、遅延悪化（時間の経過に伴い悪化する）、慢性化（悪化した状態が継続し回復しない）、継続的危機（常に悪い状態にある）がある（石川，2017）。

イ)SRにおいてストレスフルな状況または慢性的な逆境に対する人の反応を抑制、改善、または修正するメカニズムを防御プロセスとよび、以下の4タイプが含まれる（Resnick, M. D. &

Table2 思春期から青年期への変化における保護要因と危険要因

	側面	保護要因	危険要因
人間	身体	身体的変化の安定、身体像の受容	身体的・生物的脆弱性、身体表現・症状の固定化
	心理	知識・認知機能の増進、感情の安定化と体験に基づく自信、現実的な見方	不適切な学習・認知、悪循環による自信の喪失、過剰適応/現実逃避
	役割	期待される役割(大人-子ども)の混乱の低下、性役割の受容	防衛のための役割の固定化、役割行動への反感・未修得
環境	物理的	生活環境(特に学校)の変化と拡大(学校割合の相対的縮小)	学校との不適合、生活環境の荒れ
	対人的	親からの自立の進行、大人(親と教師)の相対化、仲間関係・集団の変化	親との葛藤の継続・再燃、大人への不信の継続・悪化、仲間からの逃避
	社会的	許容される自由の拡大、仲間集団・文化の変化	守られていない空間、自分が出せる居場所の欠損、大人世界からの誘惑

Taliaferro, L. A., 2011)。a)リスクによる影響やリスクにさらされる経験を低減する。b)ネガティブな連鎖反応を低減する。c)自尊感情と自己効力感を高める。d)ポジティブな人間関係と新しい機会を提供する。具体的な防御因子は、認知・問題解決スキル、情動や行動のコントロール、肯定的な自己知覚・効力感・価値、人生には意味があるという信念と希望などの個人要因、効力のある親、有能な大人、向社会的な仲間などの対人関係、社会的環境として宗教的信仰と参加、社会経済的な有利性、機能的なコミュニティなどの社会的環境がある。ただし、因子の有効性についての知見は必ずしも一貫していない。

ウ)危険要因は本人の生物的・心理的脆弱性や有害な環境、非保護的な環境、年齢や発達段階にふさわしくない体験等が含まれるが、特に同時に生じる「複合的リスク」は指数関数的にリスクを増大させる。

DMR に関連する思春期から青年期への変化を保護要因と危険要因別に Table2 に整理した。人間-環境システムアプローチ(山本・ワップナー, 1992)にしたがい人間の3側面(身体・心理・役割)、環境の3側面(物理的、対人的、社会文化的)別に要因を整理した。

2.5 発達のモラルレジリエンスとレジリエンスとの比較Ⅲ：力・能力として

レジリエンス研究をレビューした石原・中丸(2007)は、個人内特性としてのレジリエンスを「能力」と「心理的特性」に大別した。前者には柔軟に自我をコントロールする能力、能力をはっきり示す能力、高い社会的能力の維持、能力の発達等が、後者にはストレスの負の効果を和らげ適応を促進させる特性、弾力性、生きる力等が含まれる。

レジリエンスを「力(能力)」としてとらえた場合、その構成要素・類似概念は次のように整理される(小花和, 2004; 平野, 2010)。ソーシャルスキル(共感性、社会的外向性、自己開示、ユーモア)、コンピテンス(問題解決能力、洞察力、知的スキル・学業成績、自己効力感・有能感)、自己

統制（自立・自己統御、感情調整）、チャレンジ（興味関心の多様性、努力志向性）、好ましい気質（抵抗力、忍耐力）、肯定的な未来志向（楽観性、肯定的な未来志向性）、その他（身体的健康、自立、道徳心・信仰心、自己分析・自己理解）。DMR ではこれらに加え、悪に対する対処能力・見方や、善悪に関わる判断と意味づけ、自己と他者（大人・仲間）、社会に対する見方（信頼感）、さらに「個人的要因」を越えたソーシャルサポートや対人関係の変化（ネットワーク構築能力）も含まれる。

DMR を能力と関連づけてみるためには、次の3点を考慮する必要がある。第一に、思春期は一時的に「望ましくない」変化が生じる時期である。例えば、自我の衝動に対するコントロールは思春期（中2）において低いが、青年期（高2）にかけて飛躍的に増大する（中西・那須・浅田, 1978）。また、現実の自己像と理想の自己像との差異は男女ともに15歳で最大となる（間宮, 1974）。このような「望ましくない」状態を能力の低さや環境への不適応、有害・危険因子によるものとして捉えるのか、「子どもから大人への質的転換」に伴う必要な変容・変貌とみるのか、慎重に検討する必要がある。

第二に「力・能力」は個人内に限られず、環境との相互作用の中で獲得され、発現されるものである。平野（2015）は能力としてのSRを資質によるものと獲得されるものに分類し、資質の広がりとして、a)自己理解、b)他者のフィードバック、c)新たなスキルの獲得、d)関係性のなかでの発現をあげている。aとcは個人要因であるが、bとdは環境との相互作用によるものである。したがって、能力としてのDMRは個人要因に還元されるものばかりではなく、環境との相互作用（環境の力、および環境との相性）によりとらえる必要がある。この点に関しても《2.4》の保護要因と危険要因のリストを参照することができる。

第三に、悪はpowerと関連する（メイ, 1980）。中井（1997）は「いじめの政治学」において、「いじめは権力の問題」と述べている。Tournier（1980）も「暴力と人間」のなかで「われわれが常日頃一番よく考えていることは…力の問題（p. 191）」「暴力が実の問題とするならば、力は根の問題（p. 202）」と悪（暴力に代表される）と力との根幹的関連性を指摘している。一方、May（1980）はpowerを存在の力、生命過程の一表現と見なし、権力をa)搾取的、b)操作的、c)競争的、d)成長促進的、e)統合的に分類した。悪に対応できるのはイノセンス（無力の装い）ではなく、別のpowerであることを示唆している。

2.6 発達のモラルレジリエンスとレジリエンスとの比較Ⅳ：方向性・結果

SRにおいては長期的な予後、多面的効果測定、全体的機能の考慮が求められている（石川, 2017）。SRの結果・予後は適応や機能の維持・発揮等により一次的にポジティブな変化としてとらえられる。しかし、DMRにおいては変化と成長をそのようにとらえることはできない。DMRの変化の方向性、結果を考察するのに参考になるのは心的外傷後成長（PTG）とレジリエンス（SR）との異同に関する考察と提案（宅, 2017）である。

SRとPTGは類似している反面、複雑な関係にある（宅, 2017）。a) SRは克服や回復、適応が指標となるが、PTGはそれらがなくても（すなわち自己と環境の負の要件には変化がなくても）人間として成長しているとしか表現しようのない変化も含まれる。b) SRが高いと困難な状況に遭遇しにくかったりその状況を困難と評価しにくかったりすることがありうるが、PTGは困難な状況を前提

Tabel3 Eriksonの『図式』

時期	強さ	病理要因	世界との良好なつながり	陥りやすい問題
I 乳児期	希望	閉じこもり	ヌミノース	偶像主義
II 幼児前期	意志	強迫	裁判的	律法主義
III 遊戯期	目的意識	抑制	芝居的 (劇的)	道徳主義
IV 学齢期	コンピテンス	不活発	形式的	形式主義
V 青年期	忠誠	拒否	イデオロギー	全体主義

(不可欠)としている。c) SRはポジティブな変数と正の相関になりやすいが、PTGでは「あきらめる」「うけいれる」「しばらく待つ」などこれまではポジティブとは評価されなかったものが含まれる。これに関連して、レジリエンスは「早く」「元の状態に」戻ることが重視されるが、PTGでは「焦らず」「もがき、葛藤を抱えながら」する期間を重視する。d) SRでは「ネガティブな条件にも関わらず、ネガティブな反応が少ない」ことが評価されるが、PTGでは「ネガティブな条件においてネガティブな反応も受けとめながら居続ける」ことが評価される。以上をふまえ、宅(2017)は、a)逆境からは早く克服すべきであり、b)そのためには支援を行うという見方を批判し、c)受け止め方や目的・志向性、対処法に個人差と多様性を認めることや、d)そもそも困難に合わない生き方をも尊重する視点を提案している。

このようなPTGのとらえ方はDMRにもあてはまる。青年期には悪との接触が不可避で、そこに意味を見出す一方で、「悪いことは悪い」と自分なりの確固とした道徳規範を身につけ、複雑な社会で悪と向き合う・つきあうしなやかさも求められる。東山(1992)は(中年のあり方に関して)「清濁併せ呑む」ことを悪・汚い、「酸いも甘いも噛み分ける」ことを魅力・幅としている。自身もナチに対するレジスタンス運動に参加し、その経験に基づく道徳哲学を打ち立てたフランスの哲学者Jankélévitch(2007)は、「悪を殺すためには、悪のようにして、自分も多少性悪でなければならぬ」、「必要悪の考慮は、つねに真剣さの証だ」と「純粹主義」を批判し、「中間地帯の真摯さ」を求めている。

DMRでは両義的・弁証的思考が求められる。そこで参考になるのが、E. H. Erikson(2011)の『図式』(p. 34; 西平, 2014b, p. 105; Table3)である。ここではよく知られている心理社会的危機(例えば基本的信頼対不信)ではなく、「土台となる強さと病理につながる要因」と「世界との良好なつながりと陥りやすい問題」の対を取り上げる(西平, 2014b)。Erikson(1971)は人間の本性の中にある力強い倫理のための基盤をvirtueと呼び、日本語には「徳」と訳された。後にstrength(活力)と言い換えられたが、その強さは「固さ」ではなく「揺れても戻るしなやかさ」であり、レジリエンスに近い(西平, 2014a)。

例としてIV段階を取り上げると、世界を技術や文化の仕組みとして見て、技術を操作し自分のために役立っていることを「形式的」つながりというが、その仕組みばかりが過剰に重視され内容が空疎になるとき「形式主義的」に墮する。悪との関わりに置き直すと、世界の仕組み(現実)を理解

し、そこに能力・技術を用いて関与（コミットメント）しながら悪と接するのは「形式的」であるが、規範や常識のみに則り対処しようとするのは「形式主義的」になる。Erikson の理論に基づき、DMR の概念はより豊かになることが期待される。特に DMR と個人的要因としての「強さと病理要因」、世界とのつながりとしての「良好なつながりと陥りやすい問題」との関連性が注目される。

3 青年期における思春期のとらえ直しと今後の研究課題

3.1 青年期における思春期体験のとらえ直し

これまで「思春期の問題行動（いじめ、不登校）に対する青年期のとらえ直し」について、大学生の講義におけるレポートや感想を分析し、次のことを見出してきた（鹿寫, 2010, 2013）。ア）問題行動への関与の仕方は多様である（いじめの被害者～加害者／経験なし、不登校の経験者、友人の不登校への無力感、教師に対する信頼・感謝～不信・恨み）。イ）問題行動の影響が青年期にも持続している（「今でも胸が痛む」「まだ夢に出てくる」）。ウ）問題行動への理解がされる（「いじめの理由・過程がわかった」「影響の強さがわかった」）。エ）思春期における体験に対するとらえ直しが生じる（「申し訳ない、恥ずかしい、謝りたい」「今考えると卑劣だった」「自分をゆるしてあげたい」「自分をほめてあげたい」）。オ）とらえ直す機会を肯定的に評価する（「もやもやがはっきりした」「答えがほしいのにつかめないう状態から解放された」）。カ）視点が子どもから大人へ移行する（「いじめにはっきりと No という覚悟が決まった」「大人が解決しなければいけないしできる」）。このように青年期において思春期の体験をとらえ直すことは大人への移行にとっても意義がある。

3.2 レジリエンス概念の問題点・課題

Tisseron (2016) はレジリエンス概念・研究に対する批判と提言として 6 つの危険性を指摘しているが、これは DMR の研究を進める上でも参考となる。a) 多様な人を統制してある方向に導こうとする。b) 出来事の負性（特に生活史との相対的な関係において）を過小評価する。c) 主体と環境との相互作用の複雑性を見誤る。d) 創造的な対応に比べて平凡な対応を見くびる。e) 後驗的 (a posteriori) な知見に基づき、先驗的 (a priori) な予測・予見をする。f) 予測的予防を実施する。トラウマへの介入では「統制して導こうとする願望を断念すること」が第一に求められる。DMR は「発達」と「モラル」という方向性が不可避・不可欠であるので一層の注意と配慮が求められる。

思春期は自尊感情や QOL (Quality of Life) が低下し、不登校や引きこもり、健康危険行動等の困難な状況に陥る可能性がある一方で、大多数の子どもは「生活」「目標・意欲」「家庭」「友だち」について「満足」しており、不全感を抱いているのは少数派であるという調査もある（青木, 2012）。ネガティブな側面に合わせてポジティブな側面も見えていく必要がある。

3.3 今後の研究課題

以上の概観と提案から DMR に関する今後の研究課題は以下のようにまとめられる。

- A) 思春期における悪との接触：種類、頻度、強度、自己・仲間・大人・社会に対する見方（以下 4 つの見方）の変化、および思春期以前との連続性と違い、関連性《2.3》
- B) 思春期から青年期にいたる悪に対する見方・関わり方の変容過程、およびその保護要因と危険要因《2.4》

C)青年期における思春期と悪に対するとらえ直し、特に4つの見方の変化（とその契機）と他の変数（認知・社会能力、自尊感情、志向性等）との関連《2.6》

D)悪に対する見方・関わり方の発達の弁証法的变化の記述《2.6》

E)DMRに関わる能力の記述・測定・評価と「悪と力（権力、能力）」との関連性の考察《2.5》

DMR 概念による悪に対する見方・関わり方の変化・変容を通して、思春期・青年期における全般的・横断的体験の様相と、段階を越えた成長・発達の様相を理解することも期待される。

引用文献

- 青木亜里. (2012). 思春期の関連要因と PTG. 近藤卓 (編著), *PTG 心的外傷後成長*. (pp. 146-157). 東京: 金子書房.
- Erikson, E. H. (1971). *洞察と責任* (鑪幹八郎訳). (Erikson, E. H. (1965). *Insight and responsibility*. New York: W.W.Norton.)
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (2001). *ライフサイクル、その完結 (増補版)*. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳) 東京: みすず書房. (Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (1997). *The life cycle completed. Expanded Edition*. New York: W. W. Norton.)
- Finkelhor, D. (2010). *子ども被害者学のすすめ*. (森田ゆり・金田ユリ子・定政由里子・森年恵訳) 東京: 岩波書店. (Finkelhor, D. (2008). *Childhood victimization*. Oxford: Oxford University Press.)
- 東山紘久. (1992). 男性における中年期の危機・意味・課題. 氏原寛・東山紘久・川上範夫 (共編) *中年期のこころ*. (pp. 1-14). 東京: 培風館.
- 平野真理. (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み. *パーソナリティ研究*, **19**, 94-106.
- 平野真理. (2015). *レジリエンスは身につけられるか*. 東京: 東京大学出版会.
- 石垣琢磨. (2017). 総論: レジリエンスとは何か? *臨床心理学*, **101**, 603-606.
- 石原由紀子・中丸澄子. (2007). レジリエンスについて—その概念、研究の歴史と展望—. *広島文教女子大学紀要*, **42**, 53-81.
- 石川信一. (2017). 子どもの心の問題とレジリエンス. *臨床心理学*, **101**, 607-612.
- Jankélévitch, V. (2007). *徳と愛 I*. 東京: 国文社. (Jankélévitch, V. (1970) *Les Vertus et l'amour: Traité des vertus II*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- 鹿寫達哉. (2010). 思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し～教職志望学生の受講前後のいじめに対する見方の変容～. *広島国際大学教育論叢*, **2**, 3-13.
- 鹿寫達哉. (2013). 思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し (2) ～大学生の不登校に対する見方の受講による変容～. *広島国際大学教育論叢*, **5**, 17-28.
- 鹿寫達哉. (2017). 思春期における悪との接触に対する青年のとらえ直し—発達のモラルレジリエンスモデルの提案 (1). 日本発達心理学第 28 回大会.
- 加藤弘通. (2007). *問題行動と学校の荒れ*. 京都: ナカニシヤ出版.

- 河合隼雄. (1997). *子どもと悪*. 東京：岩波書店.
- 河合隼雄. (1999). *いじめと不登校*. 東京：潮出版社.
- 間宮武. (1974). 生徒の内面形成を促進するうえで必要な教育上の配慮について. 文部省教育研究開発調査研究委員会報告書.
- May, R. (1980) *わが内なる暴力*. (小野泰博訳). 東京：誠信書房. (May, R. (1972) *Power and innocence*. New York: W. W. Norton.)
- 宮谷宣史. (2004). *悪の意味：キリスト教の視点から*. 東京：新教出版社.
- 三宅邦建. (2004). いじめの被害者経験と、その自己開示と成人期の愛着との関係. *九州保健福祉大学紀要*, **5**, 1-10.
- 水谷聡秀・吉津潤・雨宮俊彦. (2010). 小中高時代のいじめ経験が大学生に与える影響の検討. 日本心理学会第74回大会 157.
- 文部科学省. (2001). 不登校に関する実態調査. 平成五年度不登校生徒追跡調査報告書.
- 村山恭朗・伊藤大幸・浜田恵・中島俊思・野田航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井 正次. (2015). いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性. *発達心理学研究*, **26**, 12-33.
- 中井久夫. (1997). *アリアドネからの糸*. 東京：みすず書房.
- 中村雄二郎. (1994). *悪の哲学ノート*. 東京：岩波書店.
- 中西信男・那須光章・浅田尚子. (1978). 青年期の自我構造に関する研究. *相談学研究*, **11**, 57-68.
- 西平直. (2014a). アイデンティティ研究における人格的活力(徳)の研究. 鑪幹八郎(監修), *アイデンティティ研究ハンドブック*. (pp. 149-158). 京都：ナカニシヤ出版.
- 西平直. (2014b). エリクソンは発達の「環境」をどう描いたのか. 鈴木忠・西平直 *生涯発達とライフサイクル*. 東京：東京大学出版会.
- 野中公子・永田俊明. (2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響. *九州看護福祉大学紀要*, **12**, 115-124.
- 小花和 Wright 尚子. (2004). *幼児期のレジリエンス*. 京都：ナカニシヤ出版.
- 大久保純一郎. (2012). 回顧的に報告されたいじめ体験と青年期心性の関連性(1) 一対人恐怖心性, 自尊感情, ストレス反応について一. *同志社大学教職課程年報*, **1**, 57-66.
- 小塩真司. (2016). レジリエンス. 中間玲子(編著), *自尊感情の心理学*. 金子書房. pp. 120-130.
- Resnick, M. D. & Taliaferro, L. A. (2014). レジリエンス. (小花和 W. 尚子訳) 子安増生・二宮克己(監訳), *青年期発達百科事典 第1巻 発達の定型プロセス*. 東京：丸善出版. (Resnick, M. D. & Taliaferro, L. A. (2011) Resilience. In B.B. Brown & M. J. Prinstein (eds.) *Encyclopedia of Adolescence*. (pp. 430-439) London: Academic Press).
- Rutter, M. (2006). Implications of resilience concepts for scientific understandings. *Annals of the New York Academy of Science*, **1094**, 1-12.
- 宅香菜子. (2010). *外傷後ストレスの研究*. 東京：風間書房.
- 宅香菜子. (2017). レジリエンスとPTG(心的外傷後成長). *臨床心理学*, **101**, 654-658.
- Tisseron, S. (2016). *レジリエンス*. (阿部又一郎訳). 東京：白水社. (Tisseron, S. (2007) *La*

Résilience. Paris: Presses Universitaires de France.)

戸田有一. (1997). 教育学部生のいじめ・いじめられ経験といじめに対する意識. *鳥取大学教育学部実践研究指導センター紀要*, **6**, 19-28.

Tournier, P. (1980). *暴力と人間*. (山口寛訳) 東京: ヨルダン社. (Tournier, P. (1977) *Violence et Puissance*. Neuchatel.: Delachaux et Niestle)

氏原寛. (1985). 悪の精神分析. 馬場謙一・福島章・小川捷之(編), *日本人の深層分析4 攻撃性の深層*. 東京: 有斐閣. pp.37-61.

山口由加・長野恵子. (2012). 過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響. *西九州大学健康福祉学部紀要*, **43**, 39-48.

山本多喜司・ワップナー, S. (1992). *人生移行の発達心理学*. 京都: 北大路書房.

横湯園子. (2002). *教育臨床心理学*. 東京: 東京大学出版会.